

松 山 大 学 論 集
第 34 卷 第 3 号 抜 刷
2 0 2 2 年 8 月 発 行

コロナ禍の大学における
オンライン異文化交流の実践とその有効性
—— Zoom を用いた宗教文化教育を事例として ——

岩 崎 真 紀

コロナ禍の大学における オンライン異文化交流の実践とその有効性

—— Zoom を用いた宗教文化教育を事例として ——

岩 崎 真 紀

はじめに

2020 年はじめ以降、世界各地で新型コロナ・ウイルス感染症 COVID-19（以下、コロナ）が猛威をふるっている。日本の高等教育の観点からみると、2020 年 2 月 7 日に厚生労働省（以下、厚労省）がコロナを指定感染症に指定した翌月の 3 月 24 日、文部科学省（以下、文科省）が各大学へ新年度の授業に関する文書を通知した（文科省、2020 年 3 月 24 日）。大学設置基準において遠隔授業により修得できる単位数の上限は 60 単位に定められているが、コロナ禍における例外的対応について示した「令和 2 年度における大学等の授業の開始等について」というこの通知を受け、多くの大学が学生や教職員のキャンパスへの入構を制限し、オンライン授業へと舵を切った。

筆者が勤務する松山大学では、一部の大学同様オンライン授業への準備期間を設けたため、2020 年度の開始は従来の 4 月上旬から 5 月上旬へと変更され、前期が終了したのは 9 月上旬だった。この期間、松山大学ではほとんどの科目がオンライン授業となり、筆者が担当したすべての科目でもオンライン会議システム Zoom を用いた同時双方向型授業を行った¹⁾

筆者は 2019 年度 4 月に松山大学に着任して以降、毎年、現代の日本、中東、欧州の宗教にかかわる科目を 9 科目（前期 4 科目、後期 5 科目）と 1 年生向けの演習科目（通年）を 1 科目担当している。本稿では宗教文化教育の一環とし

て2020年度前期に開講した「宗教と民族Ⅰ」（現代イギリスの宗教と移民）を事例として、オンライン異文化交流の可能性について論じる。具体的には、イギリス在住ムスリム学生をゲスト・スピーカーとしてZoomで招聘した授業の実践報告を通じて、オンラインによる異文化交流の有効性を検討する。

なお、本稿で使用する写真、学生によるコメント、アンケート調査の結果等は、すべて関係者に許可をとったうえで使用している。原則としてコメントはすべて原文のまま引用し、明らかな誤字脱字のみ修正した。

1. 宗教文化教育における「生きた学び」の重要性と オンライン異文化交流の可能性

現代宗教にかかわる大学教育の実践においては、宗教に関する「生きた学び」が重要な要素の1つである。本章ではその背景にある宗教教育、なかでも、宗教文化教育について簡単に確認しておきたい。

一般的に日本における宗教教育は、宗教知識教育、宗教情操教育、宗派教育の3つの領域に分けられる（文科省編，2003，124-125頁；井上，2005，191頁）²⁾さらに近年は、2000年代に「宗教と社会」学会に属する研究者から提起された宗教文化教育という新たな概念が注目されている（井上，2005，193頁；井上，2015，33頁）。宗教文化教育は、宗教知識教育をより広い観点から行い、自文化における伝統的宗教文化や異文化宗教への理解を深めることを目指す教育手法である。その背景には、グローバル化にともない日本においても「異質な宗教文化の存在を知り、それに対する理解の態度を養うための教育」（井上，1998，19頁）や「文化としての宗教について生きた学びをする教育」（日本宗教連盟，2003）に関する必要性が生じてきたことがある（傍点はいずれも引用者による）。さらに、2006年の教育基本法改正において、「宗教に関する一般的な素養」を尊重すること（第15条）が新たに定められ（文科省，公開年不明）、この傾向は一層強まった。

コロナ禍以前、筆者は松山大学で担当していた宗教に関するすべての科目

で、宗教文化教育の根幹である「宗教についての生きた学びをする教育」を重視してきた。具体的には、大学の徒歩圏にある信仰の場（神社、仏教寺院、キリスト教会、ムサッラー〔イスラームの小規模礼拝所〕）のいずれか）に赴き、学生と信仰者との交流を実践してきた。また、宗教指導者や一般信徒の方をゲスト・スピーカーとして授業に招聘し、キャンパス内での交流活動も行ってきた。学生が「宗教を生きる」人々と対面で交流するこうしたアクティブ・ラーニングは、筆者が担当する宗教に関する授業においては必要不可欠な要素である。

コロナ禍により2020年度前期は、対面での交流を軸とするこうした活動はすべて実施不能となったが、それが「宗教についての生きた学び」を妨げることにはならなかった。それどころか、幸運なことにコロナ禍はZoomというツールを用いた新たな教育手法に目を向けさせ、国内でも遠隔地在住の仏教僧侶や海外在住ムスリム学生とのリアルタイムの交流という、宗教文化教育の可能性を広げることとなった。学問分野は異なるものの、筆者同様Zoomによる異文化コミュニケーションを取り入れた授業を実践した宮谷（2021）のつぎの言葉は、まさに筆者の思いを表している。「新型コロナウイルス感染症の流行は、学生、教師、大学にとって『奇禍』であったが、これに対応するさまざまな試みから、新しい学びの経験など『奇貨』となった側面もある」（18頁）。

2. オンライン授業の実践

2.1 2020年度前期担当科目の全体像

表1は2020年度前期に担当した全5科目のテーマ、授業形態、実施したおもしろなアクティブ・ラーニングである。網掛けにした「宗教と民族Ⅰ」が本稿で焦点をあてる科目である。

表1. 2020年度前期担当科目の概要

科目名	科目区分, 対象学部・学年, 履修者数, 曜時限	授業テーマ	授業形態	おもなアクティブ・ラーニング
1 宗教学 I	<ul style="list-style-type: none"> ・教養教育科目 ・全学部 ・全学年 ・25人 ・火曜5限 	神道と仏教からみる日本の宗教	オンライン (Zoomによる同時双方向)	<ul style="list-style-type: none"> ・リアクション・ペーパー ・Zoomを用いたグループワーク, グループ発表 ・宮城県在住の仏教僧侶・臨床宗教師によるオンラインでのゲスト・トークと交流 ・個人での宗教施設(神社, 寺院, キリスト教会, モスクのいずれか)を対象としたフィールドワーク
2 宗教と世界 I (1), (2) (2クラス)	<ul style="list-style-type: none"> ・教養教育科目 ・全学部 ・全学年 ・計87人 ・木曜2限 ・金曜1限 	異文化理解と多文化共生の視点から学ぶイスラーム	同上	<ul style="list-style-type: none"> ・リアクション・ペーパー ・Zoomを用いたグループワーク, グループ発表 ・松山市在住のムスリマ研究員によるオンラインでのゲスト・トークと異文化交流
3 宗教と民族 I	<ul style="list-style-type: none"> ・教養教育科目 ・全学部 ・全学年 ・54人 ・月曜4限 	現代イギリスの宗教と移民	同上	<ul style="list-style-type: none"> ・リアクション・ペーパー ・Zoomを用いたグループワーク, グループ発表 ・イギリス在住のシリア系ムスリム大学生とのオンライン異文化交流
4 一般基礎演習 (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・専門基礎科目 ・経済学部 ・1年生 ・16人 ・金曜3限 ・ほぼ隔週 ・通年開講 	1年生向けゼミ学部共通 テーマ: 大学に慣れる, プレゼン能力を高める, 文章作成能力を高める。	同上	<ul style="list-style-type: none"> ・リアクション・ペーパー ・Zoomを用いたグループワーク, グループ発表 ・松山市在住のムスリマ研究員によるオンラインでのゲスト・トークと異文化交流 ・個人での宗教施設(神社, 寺院, キリスト教会, モスクのいずれか)を対象としたフィールドワーク

2.2 2020年度前期「宗教と民族 I」(現代イギリスの宗教と民族) 概要

本稿では2020年度前期に担当した前述の5科目のうち、「宗教と民族 I」(副題: 現代イギリスの宗教と民族)に焦点をあてる。その理由は、オンラインでゲストを招聘したすべての科目のなかで、この科目が唯一外国在住のゲスト・スピーカーを招聘した科目であったことから、結果的にオンラインでの大

学教育におけるアクティブ・ラーニングのより広い地平を切り拓くものとなったためである。

「宗教と民族Ⅰ」の概要はつぎのとおりである。

• **テーマ**

- (1) 植民地政策や移民受け入れの長い歴史を持ち、昨今ではブレグジットに揺れるイギリスの社会状況に焦点を当て、宗教と民族の観点から学ぶ。
- (2) とくに近年信徒数が増加し、様々な課題に直面するイスラームと中東系ムスリムに重点を置く。

• **目標**

- (1) 授業テーマに即した知識の習得
- (2) コミュニケーション能力の向上
- (3) 主体性の向上

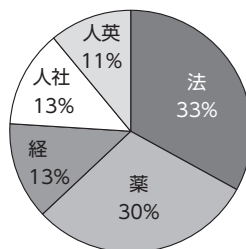
• **開講期間**

2020年6月1日～9月7日（全13回）

• **履修者数**

54人

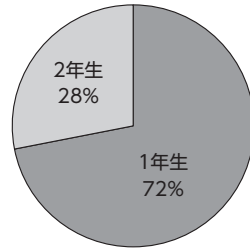
- (1) 法学部：18人
- (2) 薬学部：16人
- (3) 経済学部：7人
- (4) 人文学部社会学科：7人
- (5) 人文学部英語英米文化学科：6人



グラフ1. 「宗教と民族Ⅰ」履修者の所属学部の割合

・学 年

- (1) 1年生：35人
- (2) 2年生：19人



グラフ2. 「宗教と民族Ⅰ」履修者の学年の割合

・グループ数

9グループ（6人1組）

表2. 各回の授業内容

授業回	授 業 内 容
1	イントロダクション
2	<ul style="list-style-type: none"> ・課題（リアクション・ペーパー、グループ発表等）説明 ・グループワーク（Zoom ブレイクアウトルーム）
3	<ul style="list-style-type: none"> ・課題説明（つづき） ・イスラームの基礎知識 ・日本のムスリム移民
4	<ul style="list-style-type: none"> ・学生からの質問へのフィードバック(1) （イスラームの宗派、コロナ禍の礼拝等）
5	<ul style="list-style-type: none"> ・リアクション・ペーパーへの質問に関する説明 ・映画『ぼくらの国、パパの国』（1999英）背景説明・鑑賞
6	<ul style="list-style-type: none"> ・映画鑑賞（つづき） ・イギリスのムスリム移民に関するグループ・ディスカッション
7	<ul style="list-style-type: none"> ・オンライン異文化交流
8	<ul style="list-style-type: none"> ・前回話題になったテーマ（人種差別、文化的・宗教的多様性）に関するフォローアップ ・グループ・ディスカッションを通じたオンライン異文化交流のふりかえり
9	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ発表レジュメ初稿（第6回締切）に対する講評
10	<ul style="list-style-type: none"> ・リアクション・ペーパーへのフィードバック(2) （イギリスのムスリム移民、シリア難民危機等） ・発表準備のためのグループワーク（Zoom ブレイクアウトルーム）
11	<ul style="list-style-type: none"> ・最優秀グループの口頭発表・質疑応答・講評
12	<ul style="list-style-type: none"> ・優秀グループの口頭発表・質疑応答・講評
13	まとめ

• **アクティブ・ラーニングの内容（各内容の末尾の括弧内は回数）**

- (1) Google Form を用いた計 400 字前後のリアクション・ペーパー（毎回）
- (2) 海外出身ゲストとのオンライン異文化交流（1 回）
- (3) オンライン・グループワーク〔含ディスカッション〕（正課内 4 回，正課外 5 回以上）
- (4) 学術発表レジュメ作成（適宜）
- (5) オンライン口頭発表（含練習）（本番は 2 グループ各 1 回，練習は各人，各グループ適宜）
- (6) レポート作成（1 回）

3. 「宗教と民族 I」におけるオンライン異文化交流

3.1 オンライン異文化交流に関する流れ

オンライン異文化交流実施にあたっては，事前の説明と事後のフォローアップも含め，表 3 のような流れで行った。

表 3. オンライン異文化交流にかかわる授業内容

授業回	内 容
5	オンライン異文化交流とゲスト・スピーカーへの質問についての説明 （受講生は 1 週間かけて質問を準備）
6	Google フォームで記名のうえ，日本語および英語でゲスト・スピーカーへの質問を提出
7	オンライン異文化交流
8	<ul style="list-style-type: none"> • オンライン異文化交流に関するゲスト・スピーカー，受講生からのフィードバック • オンライン異文化交流で話題となったテーマ（人種差別，文化的・宗教的多様性）に関するフォローアップ • グループ・ディスカッションを通じたオンライン異文化交流のふりかえり

大学の授業において，予習や復習なしにゲスト・スピーカーを招聘したとしても，学生の学びは決して少なくはない。しかし，事前に数週間かけて授業や自主学习によりゲスト・スピーカーに関係する国や宗教，文化等について学

び、それらをふまえたうえで1週間かけて質問を考え、前もってその質問をゲスト・スピーカーに渡しておくことで、当日の学びは格段に深まる。さらにオンライン異文化交流直後にはリアクション・ペーパーで当日の学びを言語化し、翌週にはゲスト・スピーカーからのフィードバック、交流時に話題となったことのフォローアップ、グループ・ディスカッションを行うことで、経験や知識の定着がなされる。このようなことから、筆者はほとんどの授業で表3のような流れでゲスト・スピーカー招聘を行っている。

3.2 ゲスト・スピーカーのバックグラウンドと招聘のきっかけ

「宗教と民族Ⅰ」では、イギリス・イングランド北西部の中核都市の1つであるリヴァプール在住（当時）のシリア・エジプト系ムスリム学生アフマド・アル=ハティーブ（Ahmad Alkhatib）氏（1998年生まれ、招聘時22歳）をゲスト・スピーカーとして招聘した。当時はリーズ・ベケット大学生物医学優等学士学位プログラム1年次生だった。本来であればリヴァプールから約100 km北東に位置する都市リーズに引っ越しているはずだったが、オンライン授業が行われていたため、本授業にはリヴァプールからZoomで出席した。



ゲスト・スピーカー
アフマド・アル=ハティーブ氏
(出典：Leeds Beckett University)

アフマド氏はシリア出身の両親、エジプト出身の祖父（父方）をもつムスリムである。両親はシリアで2番目に人口の多い都市アレッポ出身だが、ギリシアに移住し、アフマド氏はそこで生まれ育ったため、長期にわたってシリアやエジプトに住んだことはない。15歳のときに両親とともにギリシアからイギリスに移住し、それ以降の約5年間リヴァプールに住んでいる（2022年6月の本稿執筆時はリーズ在住）。母語のアラビア語については、話す聞くはもち

地図 1. リヴァプールの位置 (出典: Google Map)



リヴァプール中心部

現代的な街並みと伝統的な街並みが共存する。

2019年8月27日

(以下、断りがない写真はいずれも筆者撮影)



リヴァプール中心部のマシュー通り

ビートルズ発祥の地として有名だが、左側のパブの外壁には、その週に開催されるリヴァプールFCとアーセナルFCの試合の情報が掲げられており、サッカー人気を物語っている。2019年8月16日

ろん、父から教えを受けたことにより読み書きもできる³⁾また、これまで長く住んだ国の言語であるギリシア語と英語も堪能であることから、トライリンガルである。アニメや漫画といったサブカルチャーを入口として日本文化に興味を持つようになり、来日経験はないものの、独学で日本語を勉強しており、現在は日本語ができる友人からも学んでいる。

筆者がアフマド氏と知り合ったきっかけは、リヴァプールにあるアブドゥッラー・クイリアム・モスク (Abdullah Quilliam Mosque)⁴⁾で2019年8月に行った調査である。家族とともに礼拝に来ていたアフマド氏が筆者を見かけ、「日本の方ですか？」と日本語で話しかけてくださったことから、ご本人やご家族との交流がはじまった。

筆者はその翌年にイギリスのムスリム移民をテーマとした「宗教と民族Ⅰ」と「宗教と民族Ⅱ」をはじめて開講することになっていた。そこに偶然コロナ

禍が重なり、日本中の大学において Zoom や Google Meet, Microsoft Teams といったオンライン会議システムを利用した遠隔授業が急速に普及したことから、海外在住ゲストスピーカーをオンラインで招聘するという新たな教育手法に考えが及んだ。

アフマド氏はイギリスのムスリム移民という授業テーマに最適であるうえ、外国にもムスリムにも縁遠い松山大学の多くの学生にとっては、年齢の近いゲスト・スピーカーは外国人ムスリムという存在を身近に感じるうえで最適の存在であった。また、日本在住ではなく、イギリス在住という点も、本授業のテーマであるイギリスについて学生の理解を深めるのに役立つと考えられた。

3.3 オンライン異文化交流当日の流れ

「宗教と民族 I」のオンライン異文化交流は第7回（2020年7月13日月曜日4限、日本時間 14：15–15：45、イギリス時間 6：15–7：45）に行われた。当日は、つぎのような流れで授業を進めた。

- (1) 受講生全員によるアラビア語の挨拶（5分程度）
- (2) ゲスト紹介（5分程度）
- (3) ビデオ通話によるゲストと学生との Q&A（70分程度）
- (4) ゲストから一言（5分程度）
- (5) おわりに（5分程度）

当日のすべてのやりとりは原則として英語と日本語でなされ、アフマド氏と筆者は一部アラビア語も用いた。アフマド氏が英語やアラビア語で話した部分は、筆者が必要に応じて日本語に翻訳した。学生は、事前に準備した質問については日本語と英語を用いたが、それ以外の部分は筆者が英訳した。ただし、一部学生は準備していない部分についても英語を用いた。

3.4 ゲスト・スピーカーに対する学生からの質問（回答者数 48人）

本節では学生からアフマドさんに対して出された質問について考察する。質問は事前に Google フォームを用いたリアクション・ペーパーを通じて収集し、48人が回答した。以下では、読みやすいよう、ある程度共通点のあるテーマごとに分類した。

- 1) イスラームにかかわる質問（全体で 24 問）。以下、小テーマごとに分類。
ーイスラーム（ゲスト・スピーカー自身の信仰への思い）にかかわる質問（8問）

- (1) アフマドさんにとってイスラームはどのようなものですか。
- (2) 自分が信仰している宗教に関してどう思いますか？
- (3) ムスリムとして、1番大切にしていることはなんですか？
- (4) ムスリムでよかったと思うときはどんな時ですか。
- (5) 信仰深いムスリムになるため、ムスリムの皆さんが努力している点は何のようなことでしょうか。
- (6) イスラームの文化の中で、あなたはどのような文化が好きですか。
- (7) ムスリムとして、人に持っていてほしい考えはありますか？
- (8) アフマドさんはイスラームの無い日常生活を想像することができますか？

- ーイスラーム（宗教的義務）にかかわる質問（6問）

- (1) イスラームのルールの中で大変だと思うルールは何ですか。
- (2) ラマダーンはつらいですか。
- (3) ハラル食品が手に入らないとき、もしくはハラル食品かどうか分からないときはどうしていますか。
- (4) もしも礼拝の時間に遅れた場合はどうしますか？

- (5) なぜイスラームでは、女性は肌や頭を隠さなければならないのですか？
- (6) ムスリムは人生に1回以上ハッジ（引用者注：ムスリムに義務づけられた5つの行いの1つであるマッカ巡礼）を行うそうですがアフマドさんはマッカに行ったことがありますか。

ーイスラーム（宗教実践の開始年齢）にかかわる質問（2問）

- (1) イスラム教の教えはいつから行っていたのですか？
- (2) イスラームの人は何歳ごろからコーランを読み始めますか？

ーイスラーム（家族の信仰）にかかわる質問（2問）

- (1) 家族間で信仰の熱心さに差はありますか？
- (2) 両親はそれぞれエジプト人とシリア人（引用者注：実際には両親ともシリア人で、父方の祖父がエジプト人）ですが、信仰する宗教は同じですか。また、宗教がそれぞれ違う場合アフマドさんの生活にどのような影響を及ぼすのでしょうか。

ーイスラーム（モスク）にかかわる質問（1問）

- (1) モスクのメンバーで行う社会貢献活動に参加されたことはありますか？

ーイスラーム（コロナ禍への対応）にかかわる質問（3問）

- (1) 現在コロナの影響で礼拝などに支障が出ていると思いますが、その他にもムスリムの方にどのような影響がありますか。
- (2) コロナ・ウイルスの影響下で、礼拝はどうしているのですか。

- (3) 世界ではコロナ・ウイルスが流行っていますが、(モスクのメンバーで行う社会貢献活動として行う) ホームレスへの炊き出しはどのようにして行っていますか？

ーイスラーム(葉)にかかわる質問(1問)

- (1) ムスリム独自の葉はありますか？

ーイスラーム(他宗教との関係)にかかわる質問(1問)

- (1) なぜ、エルサレムは、イスラム教、キリスト教、ユダヤ教の聖地が重なってしまったのですか？

2) 移民にかかわる質問(11問)

- (1) イギリスに移り住んだことにより、日常生活で何が変わりましたか。
- (2) アフマドさんがイギリスに移民してきて戸惑ったことは何ですか？
- (3) イギリスでの生活で文化的な違いから不便なことはありますか。
- (4) 移民先で暮らしにくいと感じたことはありますか？
- (5) アフマドさんがイギリスに住んでいる今、ムスリムとして一番大変と思ったことは何ですか？
- (6) 移民をした中で最も大変だったことは何ですか。
- (7) 母国とイギリスの文化の違いで最も不便だったことはなんですか？
- (8) イギリスとシリア間での、文化やイスラームへの考え方の違いは何でしょうか。
- (9) イギリスのイスラームにおいて特徴的なことなんですか？
- (10) イギリスはキリスト教徒が多いと思うのですが、改宗しようと思ったことはありますか？

- (1) アフマドさんは、異文化の人々とどのように交流しますか。

3) 差別にかかわる質問 (3問)

- (1) アフマドさんは今までに、宗教や文化の違いで差別を受けたことはありますか？
- (2) 宗教が違うという理由で海外などで何か言われたり、されたりした経験はありますか。
- (3) 他国や他人種の差別用語などは学校などで扱う機会はあるのですか。

4) 日本にかかわる質問 (10問)

- (1) 日本の文化に興味を持ったきっかけは何ですか？
- (2) アフマドさんはなぜ日本文化に興味を持つようになったのですか？
- (3) 日本文化のどんなところに興味を持ったのですか？
- (4) 日本の文化で好きなものはなんですか？
- (5) アフマドさんが日本文化と自国(シリア, イギリス)の文化を比べて、最も大きな違いを感じた点は何ですか？
- (6) 初めて日本の文化を知った時、イギリスの文化と比較してみてもどのようなところが異なっていると思いましたか？
- (7) イギリスから見て日本はどう映るのか。
- (8) 一つの宗教を徹底するというより、いろいろな宗教を取り入れている日本のような国や人についてどう思いますか？
- (9) 日本で礼拝をしたり生活をしたりするとどんなことが不便だと感じますか。
- (10) 日本では、ムスリムとして困った経験はありますか？

(引用者注：アフマド氏は日本で暮らしたことはない旨は事前に説明したため、最後の2つの質問は回答者の誤解によるもの)



Zoom を用いたオンライン異文化交流の様子
2020年7月13日

質問は全部で48件出された。テーマごとの内訳は、イスラームにかかわる質問が24問、そのうち、ゲスト・スピーカー自身の信仰への思いに関するものが8問、宗教的義務に関するものが6問、宗教実践の開始年齢に関するものが2問、家族の信仰に関わるものが2問、モスクに関わるものが1問、コロナ禍への対応にかかわるものが3問、薬にかかわるものが1問、他宗教との関係にかかわるものが1問だった。イスラーム以外では、移民にかかわる質問が11問、差別にかかわる質問が3問、日本にかかわる質問が10問だった。

受講生が質問を準備するまでには少なくともイスラームやイギリスのムスリム移民についての講義を3回実施したが、質問の内容を細かくみていくと、その多くが抽象的であることが分かる。また、目立ったのが日本にかかわる質問である。イスラーム、移民について3番目に多い10問の質問があった。こうしたことは、多くの受講生が「イギリス在住のムスリム移民」というゲスト・スピーカーの属性やその生活について具体的に想像できなかったことに起因していると考えられる。

3.5 オンライン異文化交流実施時に学生が興味を持った点（回答者数 50 人）

本節ではオンライン異文化交流直後に学生が提出したリアクション・ペーパーのうち、「本日の授業の内容で興味を持った点のまとめ」を考察する。回答者は 50 人だった。読みやすいよう、テーマごとにまとめ、ある程度共通点のあるテーマごとに分類した。ただし、字数の基準を 150 字以上 400 字以内としたため、1 人の回答が複数のテーマを包含していることもある。その場合は、もっとも主張したい点が明らかな場合はそれに即したテーマとして分類した。他方で、どの点も同様の扱いである場合は「複数のポイントにかかわる回答」として分類した。とくに重要な部分について示した下線は引用者による。

- 1) イスラームにかかわる回答（全体で 41 件）。以下、小テーマごとに分類。
－イスラーム（ムスリムとの交流）にかかわる回答（13 件）

- (1) オンライン授業という仕組みを最も有効に活用した時間だったと思いました。イギリスにおけるムスリムの暮らしや、イスラームに関してリアルなお話を聞けると、学習の意欲も湧きます。お話の中で1番心に残ったのは、「イスラームはどこに行っても同じ」というお言葉です。住む国や地域によって、さまざまな勝手や利便性は変わりますが、「宗教実践」そのものに関しては変わりようがない確固たるものであると伝わりました。
- (2) 本日の異文化交流で、異文化という中でも、共通点もありまた、大きく異なることを、お聞きすることができ、大変充実した時間となった。また、他のメンバーの質問が大変興味深く、特に同じ学部の方のムスリム独自の薬については、大変興味が湧いた。日本では、漢方薬があるのに対して、ムスリムでは、祈りという形が人々の心の支えとなることに驚いた。ハラール食品が現代では入手が容易になっている現状について、世界で見ると、どのくらい理解が深まっているのかという

ことに疑問を持った。アフマドさんが礼拝のために2時から起きていたということをお聞きし、大変驚いた。

- (3) アフマドさんの笑顔や優しい受け答えが印象に残った。なぜなら、ムスリムの方々にはフレンドリーで優しい人が多いと先生の話で聞いていたが、それはイスラームを深く研究し理解している人に対してのみだと考えていたからだ。そのため、アフマドさんがイスラームを研究していない私たちに笑いかけてくれたことや優しい態度で接してくれたことにとっても驚いた。そしてこの衝撃が私の中のムスリムの人たちと接することへの恐怖をなくし、他のムスリムの人たちの話を聞いてみたいと思うことに繋がった。また、話の中に出てきたハラール食品について興味を持った。
- (4) まず、アフマドさんが日本語をとっても上手に話されていたので、とても驚きました。独学で学んでいらっしゃるとは思えないほど上手で、すごいなと思いました。また、今までムスリムの方のお話を聞くことのできる機会がなかったので、宗教や文化について詳しく聞くことができ嬉しかったです。特に印象に残っているのは、イギリスは多様性が認められていて、友達にも異なる文化的背景などは感じないという点です。
- (5) 今回はイスラム教徒のかたと短い間でしたが交流をすることができ非常にいい経験になりました。私が今回印象に残った点は、モスクでは礼拝をただ行う場所というだけでなく、ホームレスの方々へ現在はコロナ禍中なのでスーパーで購入したものを渡すそうですが、炊き出しを行ったりアフマドさんのように、そこでアラビア語を学ぶことができたりするように、社会貢献を行っているという点です。また、礼拝の時間も印象に残りました。
- (6) 外国人でありムスリムであるアフマドさんの話を聞くことが出来て、とても良い経験になった。それを聞いて日本人がイスラームに抱いて

いるイメージとはかけ離れていると感じ、尊重しあえるようなかわり方が大切だと思い、イスラームの人が個人レベルではどういう考えを持っているかや普段の宗教儀式について興味を持った。

- (7) 今回、アフマドさんによるゲストトークを通して、異なった文化を持つ人と互いを理解し合うには、実際に対話することが最も大切であることに気づいた。お話を聞き、心に残ったことが2つある。1つ目は、ハラール食品がない、もしくはそうであるか分からないときに、自分の中で神に唱えて、普通のものを食べるということだ。自分たちは宗教によるしきたりが無い分、イスラムの教えというのは、自分の中でかなり厳しいものだと考えていた。何かルールを破ってしまった場合、罰則があるのでは、とも考えていたのだが、細かい部分は自分の判断で行うということを知り、かなりフレキシブルなものであると感じた。2つ目は、もし日本に住むなら、不安なことがかなりあるとおっしゃっていたことだ。異なる文化を持っている分、両国同士完璧に同じ環境を作るというのは難しいが、少しでも住みやすいと思って貰えるよう、なにか私たちにできることを見つけるべきだと感じた。
- (8) 実際にムスリムの方からお話を聞くことでインターネットや本などからは得られない情報を知り、貴重な経験ができてとても嬉しかったです。私は、イギリスでの人種差別に対する考え方や多様性に関してとても興味を持ちました。また、どの観点からみても日本と中東の文化は異なっているとアフマドさんが感じていることに驚きました。
- (9) 今回の講義、異文化交流は、とても興味深いものでした。講義を受講する前、ムスリムの方、アフマドさんのお話が聞けるということで自分自身もわくわくしていました。しかし、同時に不安もありました。自分はあまり外国から来た人と話をしたことがありません。高校生のときも、自分は英語が得意ではないので、来日した英語の先生ともあまり話すことができませんでした。過去に車の教習所で、ベトナムの

方と話をしたことがありましたが、相手の方が、少し日本語をしゃべれたので携帯を使ったり、ジェスチャーなどで、コンビニまで道案内することができました。そういうこともあってか、多少なりとも心配していましたが、アフマドさんが、日本の文化に興味を持ってくれていて、少し身近に感じたり、先生が、アフマドさんが話してくれていることを、その度に訳してくれていたのでも分かりやすかったです。

- (10) アフマドさんの話を聞き外国の方本人から聞く話はすごくよかった。 授業で習ったことを主に教えていただき、特にムスリムは人生に一回以上ハッジを行うとあり、大学卒業後行くと聞き、すごくリアルな本当の話を聞くことができ、良い経験となった。
- (11) 今回の講義ではアフマドさんに色々なお話を聞き、アフマドさんが日本に対して思っていることや文化の違い、差別についてなど様々な話を聞くことができた。こういった経験は一生に一度あるかないかのことで、大変貴重な経験になった。また、他の方々も自分とは違った観点から質問をしており、大変参考になった。その中でも特に興味を持った点はホームレスへの炊き出しと文化の違いについてです。
- (12) 今期の授業で使われている「ほくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」の中で書かれている内容で、自分のなかであった自分の中の海外像が今回の会談（引用者注：正しくは「会談」ではなく「交流」）でけっこう変わった。実際に住んでいる人のお話で場所によって差別の度合いが変わるということを聞いて興味を持った。あとお話の中にあった（引用者注：サッカーの）スター選手の活躍によって、差別が少なくなるということを知り、すごく興味を持った。食事のお話などは日本はまだ進んでないのかなと感じた。
- (13) 初めに驚いたのは時差です。まあ、当たり前なのだが海外の方とオンラインで話す場合、が初めてだったため国境を乗り越えているよう

感じがしました。インターネットで何時間もの時差がある人と繋がれるいい時代になったものだと感じました。また、朝早くからお越しいただいたのは感謝しています。外国人と接する機会がなかったので文化の違いや思想の違い、環境の違いが有ることに気づきました。ムスリムや外国のことについて興味が少しでできた気もします。

ーイスラーム（ハラール）にかかわる回答（11件）

- (1) 今回アフマドさんの話を聞いて興味を持ったのは、ハラールについてである。以前テレビで、ホテルなどがイスラムの人のために食事をハラール食品にしているのをみてイスラームの人と全然食事が違うのかと思っていたが、そういうわけでもないことに気が付いた。意外にも、国によって食事に困ることは少ないようだ。（松山にもイスラームに向けた食事があるなど）また、アフマドさんは日本食を食べておいしいと思ってくれたそうだ。
- (2) 実際にアフマドさんが日本に來日されたときに心配する点に関しての質問に対しての、「ハラール」という部分に興味を持ちました。それから、日照時間（引用者注：正しくは太陽の位置）なども気にしており、季節によって日の出から（引用者注：正しくは「から」ではなく「や」）日の入り時間が異なるので礼拝などの時に影響するのではないかと思い、興味を持った。
- (3) 今回のアフマドさんへの質問で、ハラール食品がないときはどうするのかという質問を生徒（引用者注：学生）がしたときに、ベジタリアンの食品もなければ神に誓いの言葉のようなものと言って食べるといわれていた。この方法もイスラームの方によって差があり、多様性が様々なところで存在していることだろうと感じた。
- (4) 今回の講義で食に関することや、イスラーム独自の行いなどに興味を

持った。ハラール食品についてアフマドさんが、ハラール食品を食べるときに「デイミッラ」（引用者注：正しくは「ビスミッラー（神の御名のもとに）」）と言って食べるようにしていることを聞いて、すべてのムスリムが「ハラール食品がないから」という理由で何も口にしないことはないんだと知ることができた。また現在のイギリスでは「ハラール食品はよく見られる」とおっしゃっていたことから、イギリスの多様性の高さが目に見えた。また英語のリスニングは苦手だが、先生とアフマドさんがお米についてお話ししている場面はなぜか聞き取れて楽しかった。異文化交流は初めてだったのでよい経験となった。

- (5) 今回の授業で他の受講生の質問にハラールフードという単語が出てきた時、私はその単語の意味が何なのかわかっていませんでした。過去の授業で出てきた単語であるのにわからないのは問題であるので、ハラールフードを調べることにしました。「ハラール」とは「（イスラムの教えで）許されている」という意味のアラビア語である。つまり、「ハラールフード」は、イスラーム（引用者注：正しくはムスリム）たちの食べてもよい食べ物を指している。ハラールフードを覚えるにあたって、許されている食べ物ではなく禁じられている食べ物を覚えるほうが効果的といわれている。禁じられているものは豚肉とアルコールである。
- (6) ハラール食品がない場合は、野菜を食べて「ビスミッラー」と言って他の物を口にしているのを知り、教えを大切にしていることがとても分かりました（引用者注：イスラームでは魚はハラールであるため、ハラールな肉料理がない場合はシーフードを選択するムスリムも多い。ただし、ヒレとウロコのない魚に対しては忌避される傾向にある。豚肉等のハラーム〔「イスラーム法的に禁じられた」の意〕な食物に関しては、これを食べなければ餓死するような状況では食してもよい）。また、モスクが社会貢献活動を行っていることはもちろん、コロナの影響で大変な今もアフマドさんのお父様は貢献活動を続けていて素晴らしいと思いました。このことから、モスク

が行っている活動についてとても興味がわきました。

- (7) 私は今回の授業でハラールに関して興味を持った。ハラールの食品は地方によってはなかなか手に入らないこともある。そのような時はベジタリアンの料理を食べる。もしその料理もなかったら、食べる前に神様にお祈りをしてから食事をする。現在はネットも発達しているため、ネットを使って買いそれを食べることがある。イギリスは多様性が進んでいるのでハラールフードは容易に手に入る。日本でもハラールフードは普及しており比較的簡単に食べることができる。
- (8) 本日はアフマドさんを招いて、直にムスリムの方のお話を聞くことができました。ハラール食品に関する質問が印象的で、手に入らないときはベジタリアンの食事をとることが分かりました。また、他の土地に移り住むときもハラール食品が手に入りやすいかが心配であると聞いて納得しました。その他にも宗教や文化、レイシズムに関する質問などに丁寧に答える姿をみてムスリムに対する印象が良くなりました。
- (9) ハラール食品について興味深いことを聞くことができた。現在ではネットなどの普及によって、その食品は供給できているが、アフマドさんのお父さんの時代ではそのことが難しいことがわかり、現代のグローバル化が非常に進行していることが背景として考えられました。また、もしもの場合の対処法を知ることができ、食文化についてより興味が湧きました。
- (10) イギリス在住ムスリムのアフマドさんによるゲストトークを行い、イギリス国内のムスリムの待遇（ハラール食品の入手のしやすさなど）、モスクの貢献活動、日本と中東の文化の面での違いなどを知ることができた。また、アフマドさんは異なる文化的背景を持つ人との接し方に敬意をもつことを心掛ける姿勢は大変興味深いと思った。
- (11) 日本人は、特に食べ物に気を使わなくていいから、レストラン選びに

苦勞しなくていいが、ムスリムの人たちは、食べてはいけないものがあるから、移民の候補地を決めるのにハラール食品を扱うレストランの有無が入るのが日本人の留学のときの選択には上がらないと思って興味をもった。「同じ人間だから文化は関係ない」という言葉が一番印象に残った。

ーイスラーム（礼拝）にかかわる回答（6件）

- (1) 礼拝の時間は時差ではなく日照時間（引用者注：正しくは太陽の位置）で決められていることが分かった。また白夜がある地域では22時間も断食をする敬虔なイスラムもいるが多くは自分に合ったラマダンを行っている。また、ムスリムの伝統的な文化の一つに病気になったらコーランを読むというものがある。日本では漢方があるが地域によって「薬」としての対象物が異なるとともにコーランがいかに大切な存在であるかが分かる。
- (2) アフマドさんが、日本に来たらまず最初にモスクを探すと言っていたことに興味を持ちました。ムスリムにとってのモスクは、自分が思っている以上に重要なところと感じました。また、場所によって礼拝の時間が違うということが、場所による時差ではなくて、日照時間（引用者注：正しくは太陽の位置）を5つで割るため時間が違うということは今までに聞いたことがなかったので、知れてとてもよかったです。
- (3) 早朝の礼拝に寝坊することも、きっと無いわけではないはずですが、もしも寝坊したらどうするのだろうかということが、授業を受ける以前から気になっていたのが、インターネットやテレビを介した情報ではなく、直接聞くことができたことで、想定していた以上に、1日5回の礼拝が生活に密着しているからこそ、出来ないときは次の礼拝で追いつくといったような柔軟な姿勢で行われていることが分かりま

した。また、イスラームの伝承として、神様に助けてもらうという考え方があると聞いて、日本でも病気になった人やその家族がお百度参りなどのように、神頼みをするところがあるので、少し似ていると思いました。

- (4) 話の中でアフマドさんは2時頃に起床したということを知り驚きました。起床した理由が最初の礼拝が早朝からあるということでした。宗教的義務から聖地メッカには(引用者注：正しくは「ムスリムの宗教的義務の1つである聖地マッカへの巡礼」)、まだアフマドさんは行っておらず大学卒業後3回聖地に行っている父親と一緒にいくということが分かり、聖地が遠い場所に生活拠点が位置している人々は容易に行くことができないと思いました。イギリスの先生方は、信じるものの違いや考え方などを差別するような発言や行動を抑止していることがアフマドさんの話から分かりました。
- (5) アフマドさんの父親が一日5回の礼拝時間の前に、ムスリムの人々にモスクに集まるよう呼び掛けを行っているという話に興味を持った。この呼びかけのことを「アザーン」と言い、またアザーンを唱える人のことを「ムアッジン」と呼ぶ。ムアッジンを務めるにあたって資格や年齢、経験の有無などは関係ない。しかし、早朝に行われる礼拝もあることから、礼拝に遅刻などをしない信頼のおける複数人でローテーションして担当することが基本的である。
- (6) アフマドさんご一家がイギリスにいらしてから5、6年しか経ってないのにお父上がモスクの案内、声掛け役であるアザーン役を任されていることに興味を持った。それは、日本の場合、年功序列や長年の経験などによって役割は固定化されていることが多いように思われるのでイスラーム独自の基準があるのではないかと思ったからである。



アブドゥッラー・クイリウム・モスク

モスクに通う右側の2人は、貧困者への食糧支援等を通じて社会貢献活動を行うボランティア団体 Liverpool Muslim Outreach Society のバナーを設置している。

2019年8月23日

ーイスラーム（クルアーン）にかかわる回答（3件）

- (1) まず、自分がアフマドさんにした質問で、クルアーンを何歳から読んでいたかという質問に対して、9歳という若い時期から読んでいたということが興味深かった。また、クルアーンの内容が難しいとおっしゃっていたので、実際に自分も読んでみたいと思った。他の受講生がした質問の答えの中に、イスラームでは2つの大祭があるとおっしゃっていたので、気になってその祭りについて調べてみた。ここでも宗教的な事情が絡んだ祭りであると見受けられ、そのような点では日本の祭りとも通じるものがあると実感した。
- (2) アフマドさんのお話はどれも興味深いものでした。イスラームで、9歳頃からコーランを読み始め、日曜日はアラビア語を学びに礼拝に行

き、そこでクルアーンを読むという話が一番印象的でした。家の中では基本的にアラビア語で生活しています。メッカは一生に一度は訪れたい場所でアフマドさんは大学を卒業したら行く予定であり、メッカに巡礼を終えた人は「ハッジ」と呼ばれるそうです。日本と中東の違いでは、日本は年間行事で祭りが多いことに対して、中東はあまりないことがあげられていました。

- (3) 私が質問した「イスラム独自の薬はあるのか」ということでイスラム独自の薬はないが、イスラムの伝承として神に祈ることや、コーランのある章などを読んだりすること。

ーイスラーム（アラビア語）にかかわる回答（2件）

- (1) アラビア文字の読み方は横文字ではあるが右から左に読む。アラビア語を話す者同士でもイスラームではない宗教を信じる人であればアッサーラーム・アライクムといったあいさつは行わない。アフマドさんはギリシアで生まれ15からはイギリスで過ごされている。英語を話すが家族間ではアラビア語を話すことがルールである。メッカ巡礼を三回以上行った者には名前の前に敬称がつけて呼ばれる（引用者注：正しくは1回でも巡礼を行った者はハーッジュ〔女性ならばハーッジャ〕という尊称を得る）。
- (2) ラマダーンがあり、そのあとイードという感謝祭があることに興味をもった。そして、なぜ3日にわたり、イードを行うのか。また、イードでは具体的な慣習はどういったものがあるのかに、興味を持った。アフマドさんがコーランを読むために9歳のときにアラビア語を習得し、今では堪能であるという話でしたが、海外では外国語を覚えるために費やす時間がどれくらいなのか興味をもちました。

ーイスラーム（ムスリムのサッカー選手）にかかわる回答（4件）

- (1) 初めてムスリムの方のお話を聞きとても良い経験になりました。アフマドさんの言葉の中に「イスラームは、どこに行こうとも同じである」という言葉にイスラームとしての誇りや覚悟などが感じられました。また、イギリスでイスラームに対して差別をしていた時代をなくしたのがサッカー選手のモハメド・サラールが大きく関わったことを知り、スポーツの力というものがとても素晴らしいと思いました。
- (2) サッカー選手であるリバプール所属のモハメド・サラール選手はエジプト出身であり20歳頃にイギリスにきた（引用者注：正しくはサラール選手がこのとき渡航したのはスイス）。モハメド・サラール選手やその他の選手の活躍により人種差別をする人が減ったという選手たちが持つ力に興味を持った。確かに、スポーツが持つ力は大きいと思うが、選手の素晴らしい人格が差別を減らしているのではないかと感じた。彼らの強さにはちゃんとした理由があり、練習を多くしてきたことももちろんあるが、まず人として洗練されているからだと思った。
- (3) 先生とアフマドさんの会話の中で話題に上がっていたサッカー選手のモハメド・サラールに興味を持った。スタンフォード大学によって実施された調査によるとサラール選手がリバプールFCに移籍してから市内でイスラム恐怖症事件（引用者注：イスラーム・フォビアに起因する差別的発言や言動）が18.9%減少したそうだ。またリバプールFCのサポーターのSNSによる反イスラム的な投稿が、その他のチームと比べて半分に減少したそうだ。（参考：トルコ・ラジオ・テレビ協会オフィシャルサイト、<https://www.trt.net.tr/japanese/supotu/2020/06/12/satukanosaraxuan-shou-noyi-ji-niyoriying-rivupapuraudeisuramukong-bu-zheng-shi-jian-gajian-shao-1434316>）（引用者注：このサイト自体は2022年6月22日現在無効）

- (4) イギリス，特にリヴァプールではもともと人種差別が特にみられる地域だったが，ひとりのムスリムの英雄，モハメド・サラ選手のおかげでムスリムやその他の文化や宗教について，イギリス国民が理解を示そうとするようになったこと。また，ムスリムの生活がどのようなものなのかを知ってもらうために様々なイベントや催し物を行っているということ。



リヴァプール中心部のバスネット通りに描かれた
モハメド・サラ（Muhammad Salah）選手の壁画
左側には“Ode to Mo（モー頌歌）”と題された詩も書かれている。
2019年8月16日

ーイスラーム（コロナ禍への対応）にかかわる回答（2件）

- (1) 今回の授業で興味を持った点は、モスクの人たちがホームレスの人に行っている活動についてである。特に，コロナウイルスによる活動の制限について気になったので，実際に質問もさせてもらった。現状と

しては、炊き出しは不可能であるため、テスコ(スーパーマーケット)で購入したものを配っているということが分かった。しかし、アフマドさんの暮らす地域では、ロックダウンが厳しいので、実際に活動できる人が限られてしまっているため、今後どのように対策をしていくのか、知りたいと思った。

- (2) アフマドさんのお話でイスラームのことについてたくさん知ることができました。特に驚いたことは、いつもホームレスの人たちに炊き出しを行っているということです。また、今のコロナウイルスが流行している中でもスーパーなどで売っているものを配っているということを知り凄いなと思いました。日本では無料で炊き出しがあるのはほとんどが災害が起こった時だけだけど、炊き出しを毎日するのはとても大変なことだと思います。けれどその活動にホームレスの人たちは支えられていると思うのでとてもいいことだなと思いました。

2) 差別にかかわる回答 (5件)

- (1) 人種差別についての質問に対して、アフマドさんが「先生方は人種差別主義は受け入れられないというメッセージをいつも発している」と仰しゃっていたことが非常に興味深かった。また、当然のことではあるが朝早くにズームを通して講義に出演してくださっていると聞き、国が異なれば時差が存在するということを再認識した。
- (2) イギリスがとても多様性を重視している点です。差別についての質問をしたときに、学校でいつも人種差別はいけないと先生に言われているとおっしゃっていました。また、学校の授業でも差別について学習していると聞いていました。アフマドさんの周りには自分と人種や宗教が違う人が多くいるが違いを気にしたことがないとおっしゃっていました。アフマドさんの発言から本当にイギリスは差別について強く

反対していることがわかりました。

- (3) イギリスでは多様性について取り扱う授業があるという点と、イギリスでは差別は多くないことに興味を持った。これは、受講生が尋ねた差別や多様性についての質問の回答の中で言及された内容である。なお、この回答の他に教授の補足としてリバプールで活躍しているムスリムのサッカー選手であるモハメド・サラール氏にも言及し、彼の活躍以降リバプール地域でのヘイトクライムや差別が減少したことにも触れた。
- (4) アフマドさんのお話の中で、差別に関する教育についての話に興味を持った。イギリスでは多様性に関する授業があり、ギリシャでは自分と異なる人たちについて学ぶという点。現在のコロナ禍中における、ムスリムの方たちのホームレスの方々などへの社会貢献活動についてもお話に興味を持った。
- (5) イギリスは多様性がある国で、人種差別はあるが殆ど無い。長らくイギリスに住むイギリス人がいる地域には人種差別は存在するかもしれない。アフマドさんが過去に行ったモスクでの活動には、イギリス人にムスリムの活動を知ってもらうためのパーティーなどがあった。ハラールフードが手に入らない時にはベジタリアンの食品を食べる。アフマドさんが幼少期を過ごしたギリシャではハラールフードを手に入れるのは困難であった。時代が変化するにつれてイギリスではハラールフードはどこにでも売っている。

3) 日本にかかわる回答 (1件)

- (1) アフマドさんが、日本と中東の違いで、お米の種類を取り上げられていましたが、そのお米の形が日本と中東とで異なることに興味を持ちました。中東のお米は細長く、日本のお米は短いとおもしろい相違

点だと思いました。また、コロナウイルスの影響はイギリス等、世界中でも深刻であることはニュースで知っていましたが、アフマドさんも学校の授業は遠隔で行っていることを知り、コロナウイルスの影響を実感しました。

4) 複数のポイント(礼拝, モスク, 差別, 日英比較等)にかかわる回答
(3件)

- (1) 今回の講義でアフマドさんのお話を聞き、「宗教」、「食品」、「多様性」、「言語」あらゆる分野について理解を深めることができ、イギリスには文化的、宗教的背景が異なる人々が多いということについて、改めて興味を持ちました。また、ハラール食品が手に入らない場合のお話や、アフマドさんがイギリスと日本の違いについてお話をしてくれている際に岩崎先生が気付かれた、イギリスと日本の共通点に興味を持ちました。
- (2) 今回特に興味を持った点は3つあります。1つ目は、イギリスの学校では教師が人種差別を認めない態度をとっていて、宗教や文化が異なっても気にする必要はないという教育がされている点です。2つ目は、ムスリムの方はホームレスに炊き出しをしたり、ムスリムを知ってもらうためにパーティーに参加したりして社会貢献活動を行っているという点です。3つ目は、イスラムの教えはどこであっても変わらず、異文化の人と接するときも敬意を払ってイスラムはとても平和であるという点です。
- (3) 興味を持った点は3つあります。一つ目はイギリスでは高校で多様性について学ぶことです。二つ目は礼拝の時間についてです。三つ目は日本と似た文化もあることです。

考 察

コメントは全部で50人から出された。テーマごとの内訳は、イスラームにかかわる回答が41件、そのうち、ムスリムとの交流に関するものが13件、ハラール（イスラーム法的に禁じられている物事）に関するものが11件、礼拝に関するものが6件、クルアーンにかかわるものが3件、アラビア語に関するものが2件、ムスリムのサッカー選手に関するものが4件、コロナ禍への対応が2件だった。差別に関する回答は5件、日本に関する回答は1件、複数のポイント（礼拝、モスク、差別、日英比較等）に関する回答は3件だった。

オンライン異文化交流実施前に受講生が準備した質問は平均34字だった。これに対して交流後の「本日の授業の内容で興味を持った点のまとめ」は、平均200字と大きく増えた。これは字数の基準を150字以上400字以内としたことに一因があるが、それだけでなく、ほとんどの学生がオンライン異文化交流で受けた刺激が伝わってくるような熱意のこもった内容を書いている。交流前に準備した質問は抽象的なものが多かったが、交流後のコメントは具体性に富んだものとなっており、オンライン異文化交流で学生が多くのもを学んだことを表している。

事前の質問では日本にかかわるものが10件あったのに対し、交流後のコメントでは1件のみだったこと、また、事前の質問では出てこなかったムスリムとの交流についてのコメントが13件あったことも印象的である。これらのことは、交流前は日本とのかかわりという文脈のなかでしかイスラームやムスリム移民について考えられなかった受講生が、交流を経て、海外に生きるムスリム移民について具体的なイメージをもって考えられるようになったことを意味している。

さらに、「ムスリムの人たちと接することへの恐怖をなくし（た）」、「(アフマドさんの話)を聞いて日本人がイスラームに抱いているイメージとはかけ離れていると感じ（た）」、「(交流前は)わくわくしていました。しかし、同時に不安もありました。(中略)多少なりとも心配しましたが、アフマドさんが日

本の文化に興味を持ってきていて、少し身近に感じた」(丸括弧はいずれも引用者)といったコメントからは、パソコンの画面越しとはいえ、ムスリムと実際に話して交流することにより、受講生のイスラームへの偏見や漠然とした不安感が拭い去られたことを表している。

「リアルなお話を聞けると、学習の意欲もわきます」,「(今回の異文化交流が)他のムスリムの人たちの話を聞いてみたいと思うことに繋がった」というコメントからは、このオンライン異文化交流がイスラームについての学習意欲を促進したことを表している。

事前の質問では宗教的義務に関する質問が6問あり、一定数の受講生がイスラームを「大変」なもの、「つらい」ものと考えていたことがみとれる。しかし、交流後のコメントでは「細かい部分は自分の判断で行うということを開き、かなりフレキシブルなものであると感じた」,「(個人によって)差があり、多様性が様々なところで存在していることだろうと感じた」など、イスラームの柔軟性について学んだ様子も読みとれる。

オンライン異文化交流は日本時間では午後2時15分開始だったが、これはイギリス時間では午前6時15分だった。これについて「初めに驚いたのは時差です。(中略)国境を乗り越えているような感じがしました」という受講生からのコメントがあった。紙幅の都合上、本稿では掲載できなかったが、「ゲストへのメッセージ」の欄にも、時差の都合で早朝に参加したゲスト・スピーカーを気遣う内容を書いた受講生が複数いた。同じ外国人ゲスト・スピーカーでも、彼/彼女が国内在住であれば受講生がこのように感じることはない。時差に関するコメントは、海外在住ゲスト・スピーカーの招聘によって、受講生が他国、そして、そこで生きる人の存在を実感できたことを物語っている。

4. オンライン授業に対する学生の意識

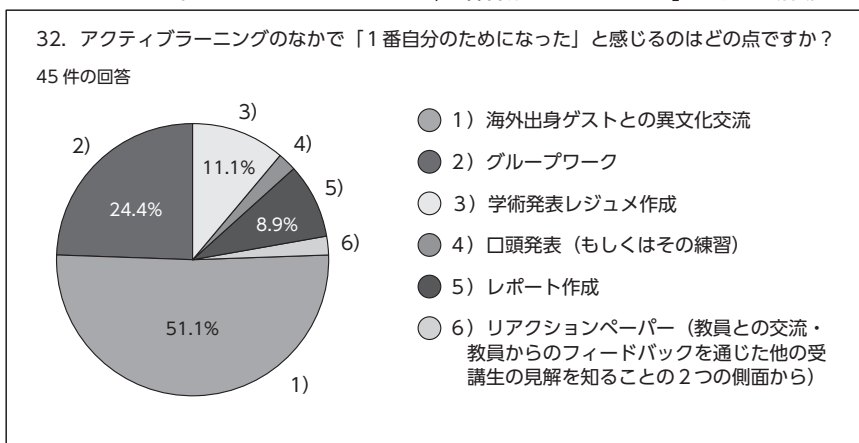
最後に、「宗教と民族I」をオンライン授業として実施したことについての学生の意識を簡単にみておきたい。本章では、Google フォームを用いた学期

末授業内容アンケートの結果について考察する。回答者数は45人だった。なお、このアンケートは大学主導で行われたものではなく、筆者が各授業で独自に行ったものである。

4.1 「宗教と民族Ⅰ」におけるオンライン異文化交流に対する学生の意識

「宗教と民族Ⅰ」では6つのアクティブ・ラーニングを実施したが、このなかで学生が「1番自分のためになった」と回答したのはムスリム学生とのオンライン異文化交流で、過半数にあたる全体の51.1%（23人）の受講生が選択した。2位（24.4%：11人）はグループワーク、3位（11.1%：5人）は発表レジュメ作成、4位はレポート作成（8.9%：4人）、5位タイはリアクション・ペーパーと口頭発表（含練習）（各2.2%：1人）だった。

グラフ3. アクティブ・ラーニングのなかで「1番自分のためになった」と感じる活動



オンライン異文化交流が自分のためになったと学生が感じた具体的な理由は以下のとおりである。読みやすいようテーマごとにまとめ、ある程度共通点のあるテーマごとに分類した。1人の回答が複数のテーマを包含していることもあるが、その場合は、もっとも主張したい点が明らかな場合はそれに即したテ

マとして分類した。とくに重要な部分について示した下線は引用者による。

オンライン異文化交流が自分のためになったと感じた理由

1) 異文化交流 (9人)

- (1) Zoom上で異文化交流ができたことは何物にも代え難い貴重な経験となった。
- (2) 今までの私の普段の生活からは外国出身の方とは関わる機会は全くなく、一生なかった機会だったかもしれなかった。しかし、この授業でコミュニケーションをとったおかげで外国出身の方への抵抗が少しなくなった。
- (3) 海外出身のゲストと話す機会が今までの人生であまりなかったため、良い経験になった。また、直接話してもらうことで異文化をより理解しやすい。
- (4) 今まで海外の人と交流することがほほなかったから。
- (5) めったに経験できることではないため。
- (6) 日本に住んでいてわからないような現地の人たちの考えを生で聞くことができたから。
- (7) 外国人との交流が今までにあったが、外国人の価値観などを聞いたことはなかったから。
- (8) 他国に住んでいる人の意見を聞けるよい機会になったから。
- (9) 海外の方と講義を受けるという新鮮さが印象に残りました。

2) イスラームについての学び (6人)

- (1) 生の声を聞くという貴重な体験をして、自分の中でより異文化について関心を持つようになり、イスラームやムスリムに対して持っていた偏見をなくすことができたから。

- (2) 自分の中にある偏見をよりリアルな形にできた。
- (3) 実際にムスリムであり移民である人物の話を聴いて学んでいることが具体的にイメージできたから。
- (4) 本や資料で学んだことだけでは分からないことが沢山あったので、実際に話を聞くことができ、疑問を解消することが出来たからです。
- (5) 本人に実際にあったことなど聞くことが出来るから。
- (6) ムスリムの方々に対して、親しみを持つことができたから。

3) 外国語によるコミュニケーション (3人)

- (1) 慣れない英語でのコミュニケーションではあったけれど聞いてみたいと思ったことへの返答や他の人とゲストのやり取りを通して教科書を読み込むだけでは得られない学びを得ることが出来たから。
- (2) 英語のリスニングスキルの実践や実際に異文化の意見をリアルに聞けたため。
- (3) 他の授業ではできない体験をすることができたとともに、ゲストスピーカーの言語を聴きとるという点でも、自分のためになったから。

4) 主体性の向上 (3人)

- (1) 自ら発表することを待つという形をとっていたので、初めは手を挙げることができないと思っていたが、いざ手を挙げ発表すると、あ、自分が発言して良いのだと実感することができた。
- (2) 質問の時間が多く取られていて、私の交流中に思いついた質問も聞くことができたので良かった。
- (3) 先生の講義を一方的に受けるだけではなかったから。

5) その他 (2人)

- (1) 自分の価値観への興味が増した。
- (2) 宗教と民族のテーマに一番近いから。

考 察

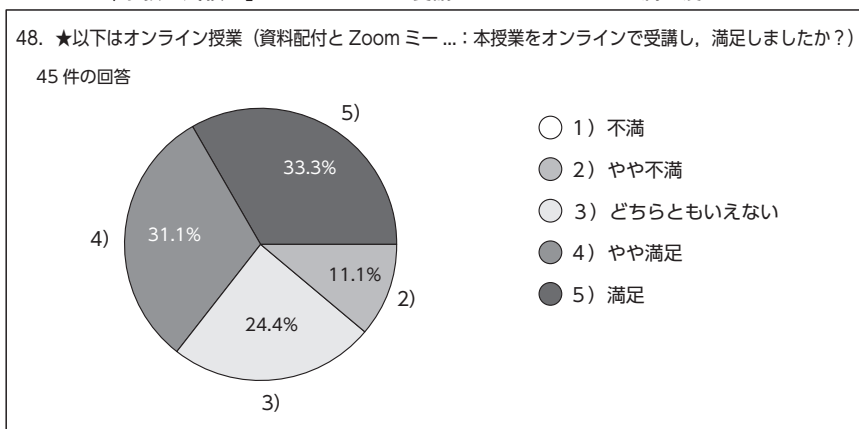
「普段の生活からは外国出身の方とは関わる機会は全くなく、一生なかった機会だったかもしれない」という受講生のコメントに象徴されるように、これまで筆者が授業を担当した松山大学の学生の多くが、外国人と接する機会がまったくない、もしくは、ほとんどないと感じていた。それも当然で、2020年度の松山大学の留学生数は18人のみである。これは、5,647人という全学生数の約0.3%に過ぎない(松山大学, 2020; 日本私立学校振興・共済事業団, 公開年不明)。教員に目を向けると、2021年度の統計では、松山大学の全専任教員178人のうち約10%にあたる17人が外国人教員である(日本私立学校振興・共済事業団, 公開年不明)。しかし、学生が彼らと関わるのは授業のみという場合がほとんどであることから、多くの学生は外国人と交流があるとはあまり感じていない。

松山市全体でみても、市の総人口503,236人に対して、住民基本台帳への登録がある外国人は0.7%にあたる3,518人にすぎない(松山市, 2022b, a)。松山大学に隣接する愛媛大学には、2019年度の時点で291人の外国人留学生在籍している(愛媛大学国際連携機構, 刊行年不明)。両大学は、文字通り隣り合う位置関係にあり、教育・研究交流協定を結んでいるが、学生間の接点はそれほどない。加えて、2020年度前期はコロナで外出もままならなかったことで、松山大学の多くの学生は大学の外国語の授業以外で外国人と接する機会はほぼなかったと考えられる。そのため、「宗教と民族Ⅰ」でのイギリス在住ムスリム学生との交流は、受講生にとって数少ない異文化交流の経験であったといえよう。

4.2 「宗教と民族Ⅰ」開講回全体を通じたオンライン授業に対する学生の意識

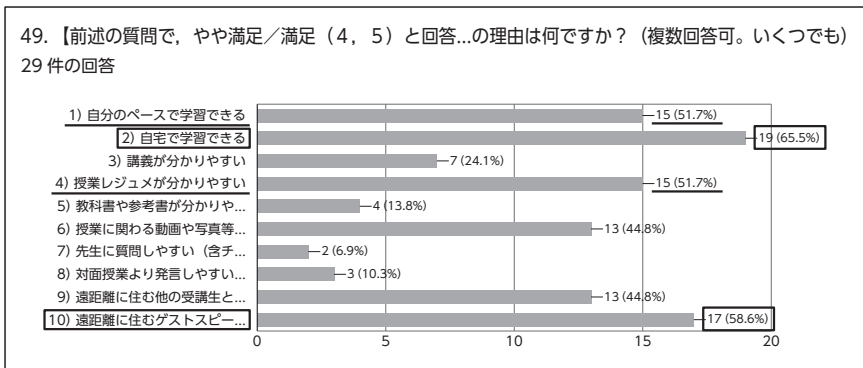
本章の最後に、13回にわたる「宗教と民族Ⅰ」開講回全体をオンラインで受講したことに對する学生の意識がどのようなものであったかをみておきたい。グラフ4に示したとおり、オンライン授業の満足度についての質問に対しては、「満足」が33.3%（15人）、「やや満足」が31.1%（14人）だった。これに対して、「どちらともいえない」は24.4%（11人）、「やや不満」は11.1%（5人）、「不満」は0%だった。何らかの満足感（「満足」「やや満足」）を得た学生の小計は64.4%（45人中29人）と過半数を占めており、多くの学生がオンライン授業に満足していたことが明らかになった。

グラフ4. 「宗教と民族Ⅰ」をオンラインで受講したことについての満足度



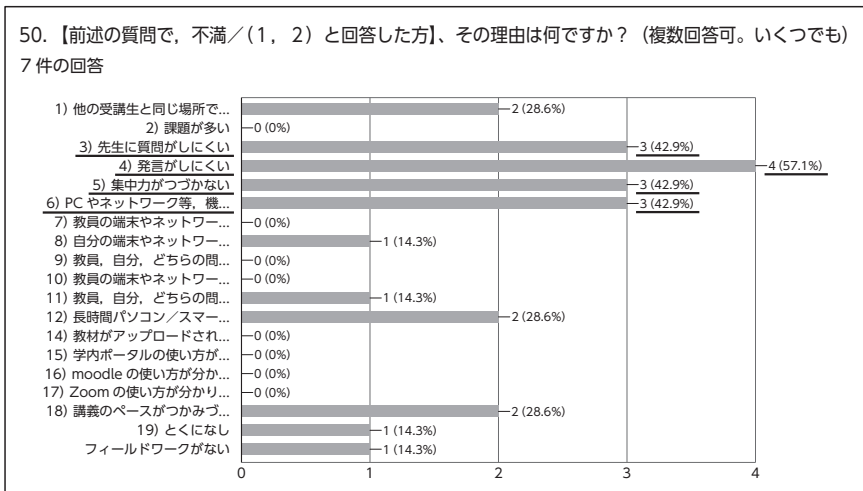
「宗教と民族Ⅰ」をオンラインで受講したことに対して「満足」、「やや満足」と回答した29人が挙げた理由（複数回答可）の上位は、「自宅で学習できる」（65.6%：19人）、「ゲスト・スピーカーとの交流」（58.6%：17人）、「自分のペースで学習できる」、「授業レジュメが分かりやすい」（いずれも各51.7%：15人）だった（グラフ5）。

グラフ5. 「宗教と民族Ⅰ」をオンラインで受講したことについて「やや満足」「満足」と回答した理由



「宗教と民族Ⅰ」をオンラインで受講したことに対して「やや不満」と回答した7人が挙げた理由（複数回答可）の上位は、「発言がしにくい」（57.1%：4人）、「先生に質問がしにくい」，「集中力がつづかない」，「PCやネットワーク等」（いずれも42.9%：3人）だった（グラフ6）。

グラフ6. 「宗教と民族Ⅰ」をオンラインで受講したことについて「やや不満」と回答した理由（「不満」はなし）



考 察

前述のとおり、文科省は日本でコロナ禍が始まってすぐの2020年3月に全国の大学に向けて、遠隔授業の実施に対する緩和策を含む通知を出した（文科省、2020年3月24日）。しかし、そのわずか5か月後の同年8月には「対面授業再開に対する圧力」（山内、2021、6-11頁）とともれる文書「私立大学における新型コロナウイルス感染症対策の好事例①」（文科省、2020年8月11日）を公開した。

これ以降、文科省は対面授業を重視した姿勢をとっているが、「宗教と民族Ⅰ」ではオンライン授業という授業形態に対して「満足」「やや満足」と回答した受講生の小計は64.4%にのぼった。さらにいうならば、筆者が2020年度前期に担当した宗教に関する他の3科目でも、「満足」「やや満足」の方が「不満」「やや不満」よりもはるかに多かった。具体的には、「満足」「やや満足」と回答した学生の小計が43.8～64.4%であったのに対し、「やや不満」は12.5～21.1%で、「不満」（4%）という回答は1科目でしか出なかった。

文科省の「対面授業再開に対する圧力」は一部の学生やマスメディアの声を受けたものであると考えられるが（山内、2021、11頁）、文科省の認識がかならずしも正しかったわけではないことをこれらのアンケート結果は表している。ただし、今回のアンケート結果は2020年度前期（コロナ禍ではじめてのオンライン授業の学期）終了時のものである。今後はこれまでの2年間のコロナ禍をふまえた松山大学、ひいては他大学における大規模アンケートや聞き取り調査の分析が必要だろう。

5. ま と め

本稿では2020年度前期に開講した「宗教と民族Ⅰ」（現代イギリスの宗教と移民）を通じた宗教文化教育を事例とし、松山大学の学生とイギリス在住のムスリム学生とのオンライン異文化交流の有効性を検討した。リアクション・ペーパーから明らかになった、海外在住外国人ゲスト・スピーカーとのオンライ

ン異文化交流が学生にもたらした効果としては、つぎのようにまとめることができる。

- (1) 文化、宗教、価値観等の多様性に対する理解の促進、敬意の醸成
- (2) 異文化（イスラーム文化）に対する理解の促進、敬意の醸成
- (3) ムスリムや移民への偏見の解消
- (4) 学生自身とゲスト・スピーカーとの共通点、日本文化とイスラーム文化の共通点の発見
- (5) 学習意欲の向上
- (6) 海外渡航の代替経験

「文化としての宗教について生きた学びをする教育」（日本宗教連盟，2003）が重視される宗教文化教育を実践する授業において、対面での宗教施設訪問やゲスト・スピーカー招聘ができないことは当初、致命的なように思われた。しかし、Zoom という新たなツールを活用することにより、海外在住外国人とのオンライン異文化交流という新たな可能性が発見できたことは大きな成果だった。

今後、コロナ禍が収まったとしても、すべての学生が海外渡航や外国人との交流ができるわけではない。このため、オンライン異文化交流、とくに海外在住外国人との交流は、大学の授業における異文化交流の手法の1つとして、社会状況を問わず、継続して実践する価値がある。ただし、文科省が目指す「学修者の能動的な学修への参加」を取り入れたアクティブ・ラーニング（中央教育審議会，2012）を成功させるためには、学生の主体性を中心に据えた、入念な事前準備と事後のフォローアップが重要であることも忘れてはならない。

コロナ禍以前も、少し考えればオンラインでの海外在住ゲスト・スピーカー招聘という手法はとれたはずだった。筆者のこれまでの約10年間にわたる大学教員としての経験のなかでは、海外在住者との打ち合わせのために Skype や

大学独自のビデオ会議システムを使用したことが何度もあった。しかし、こうしたツールを授業に活用するということまではコロナ禍以前は思い至らなかった。また松山大学の受け入れ態勢としても、海外在住ゲスト・スピーカーの招聘は想定されていなかった。後述するように、この点についてはいまだに課題が残る。

6. 今後の課題

最後に、本研究を遂行するうえで直面した3点の事務的な課題を提示したい。

1点目はゲスト・スピーカーに対する謝金の海外送金の問題である。文科省は2010年前後から10年以上にわたって高等教育におけるグローバル化（国際化）を推進している。そこでは「事務局体制の整備に関する」内容も課題として掲げられている（中央教育審議会第3期大学分科会、公開年不明）。しかしながら、松山大学の事務体制はグローバル化が進んでいるとはいえない状況にある。大きな問題の1つが、ゲスト・スピーカー制度において、ゲストの在住地が国内か国外かで謝金の支払いの可否が異なる点である。

ゲスト・スピーカー制度とは松山大学独自の制度で、簡単にいえば、1学期15回の授業のうち1回に限りゲスト・スピーカーを招聘でき、それに対して大学から謝金が支払われるというものである。筆者は毎年この制度を利用しており、本稿で言及したアフマド氏もこの枠組みのなかで招聘した。しかし、ゲスト・スピーカーが日本国内在住者であれば謝金が支払われるのに対し、海外在住者には支払われないという問題に直面した。これは担当部局が海外送金を想定しておらず、今回、その必要性が明らかになっても柔軟な対応をとることができないということに起因している。日本国内の銀行に口座を持っている場合は例外的に認められるというが、そのような海外在住ゲスト・スピーカーが果たしてどれほどいるだろうか。

この問題は2020年に「宗教と民族I」ではじめて海外在住ゲスト・スピーカーを招聘して以来、2年半近くにわたってさまざまなルートから改善を求め

つづけているが、2022年6月現在、変化はない。本稿で明らかにしたとおり、海外在住ゲスト・スピーカーとのオンライン異文化交流は非常に効果の高い教育手法で、今後のさらなる活用が期待される。そのためには、これを円滑に実践できるだけの事務体制の拡充が早急になされなければならない。研究を目的とした教員の個人研究費からの海外送金は認められているため、ゲスト・スピーカー制度もそれにつづくことが求められる。

2点目はZoomアカウントの制限に関する問題である。松山大学教員には大学からZoomアカウントが付与されるが、ミーティングのホストとなった場合、ゲストとして参加できるのは松山大学に紐づいたアカウントのみである。ゲスト・スピーカーに対してはゲスト用アカウントが貸与されるが、使用できるのは原則として前日と当日の2日間のみである。しかし、それでは十分な事前打ち合わせもできなければ、事後のフィードバックや翌年度以降の打ち合わせもできないのは明白である。さらに、受講生の口頭発表や授業の成果報告会にゲスト・スピーカーを招聘することもできない。こうした問題を解決するためにも、教員には制限なしのZoomアカウントを付与することが望まれる。仮にそれができないとしても、希望すればいつでもゲスト用アカウントを貸与できる体制にする必要がある。

3点目は成果報告会に関する問題である。本稿が助成を受けている松山大学教育研究助成では、被採択者に対して成果報告会の開催が義務づけられている。現状では、この成果報告会は極めて閉じられたかたちでしか開催できず、出席できるのは松山大学に在籍している教職員と学生のみである。しかし、これは学外者に対しても公開できるようにする必要がある。2019年度から指摘している点だが、筆者の研究のように研究協力者（含ゲスト・スピーカー）が学外者である場合、研究に対する多大な寄与がありながら、成果報告会への招聘を認めない現行のルールもしくはその運用の仕方は、透明性が求められる現代の研究のあるべき姿とは相容れない。さらに、文科省が研究者のアウトリーチ活動⁵⁾を推進していることを考えれば、研究協力者のみならず、地域社会

の人々にも開かれた会とすることも検討すべきだろう（文科省，2005年6月7日）。

ここまで課題をあげてきたが，ゲスト・スピーカー制度や助成制度にかかわる事務部局の方々には非常にお世話になっており，大変感謝している。今後もお互いに知恵を出し合い，よりよい研究・教育環境を形成していきたい。

参 考 文 献

邦文

- 井上順孝「教育は『宗教』をどう扱うのか」国際宗教研究所編『教育のなかの宗教』新書館，1998年，7-22頁。
- 「宗教教育」同編『現代宗教事典』弘文堂，2005年，191-194頁。
- 「国際的視点からみた宗教文化教育」『國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報』8号，2015年，33-45頁。
- 『グローバル化時代の宗教文化教育』弘文堂，2020年。
- 愛媛大学国際連携機構『2019年度愛媛大学国際連携機構年報』刊行年不明 (<http://web.isc.chime-u.ac.jp/file/data/data-collection/nenpo2019.pdf>，2022年6月20日最終確認)。
- 平直「日本の公教育における宗教教育の現状と家庭教育」『八重洲学園大学紀要』第2号，2006年，57-64頁。
- 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」2012年8月28日 (https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm，2022年6月20日最終確認)。
- 中央教育審議会第3期大学分科会「高等教育の国際化に関する課題の整理及び今後の検討の進め方(案)」公開年不明 (https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/attach/1346828.htm，2022年6月20日最終確認)。
- 日本宗教連盟「『新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について(中間報告)』に対する意見書」2003年1月22日 (https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo8/gijiroku/030102b.htm，2022年6月20日最終確認)。
- 日本私立学校振興・共済事業団「大学ポータル 松山大学」公開年不明 (<https://up-j.shigaku.go.jp/school/category06/0000000654502000.html>，2022年6月16日最終確認)。
- 松山市「松山市外国人人口」2022a (<http://www.city.matsuyama.chime.jp/shisei/opendata/meta-data/foreign1.html>，2022年6月16日最終確認)。
- 松山市「松山市統計ポータルサイト」2022b (<https://www.city.matsuyama.chime.jp/shisei/tokei/toukei.html>，2022年6月16日最終確認)。

- 松山大学「2020（令和2）年度 留学生数統計表」2020年（https://www.matsuyama-u.ac.jp/wp-content/uploads/2019/04/kokusai20200518_01.pdf, 2022年6月16日最終確認）。
- 宮谷敦美「コロナ禍での社会とつながる学びの場づくり」『共生の文化』15号, 2021年, 18-30頁。
- 森本一郎「公立学校における『宗教的情操教育』の可能性と課題」『甲南大学教職教育センター年報』2014年, 29-40頁。
- 文部科学省「資料3-5 アウトリーチの活動の推進について」2005年6月7日（https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/008/siryu/attach/1342833.htm, 2022年6月20日最終確認）。
- 文部科学省「令和2年度における大学等の授業の開始等について（通知）」2020年3月24日（https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf, 2022年6月20日最終確認）。
- 文部科学省「学事日程等の取扱い及び遠隔授業の活用に係るQ&A等の送付について（4月21日時点）」2020年4月21日（https://www.mext.go.jp/content/20200421-mxt_kouhou01-0004520_7.pdf, 2022年4月28日最終確認）。
- 文部科学省「私立大学における新型コロナウイルス感染症対策の好事例①」2020年8月11日（https://www.mext.go.jp/content/20200811-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf, 2022年6月20日最終確認）。
- 文部科学省「改正前後の教育基本法の比較」公開年不明（改正の概要 https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/houan.htm, 改正前後の比較 https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/06121913/002.pdf, 2022年6月20日最終確認）。
- 文部科学省編『文部科学時報』ぎょうせい, 2003年5月号, 124-125頁。
- 山内祐平「コロナ禍下における大学教育のオンライン化と質保証」『名古屋高等教育研究』21号, 2021年, 5-25頁。

欧文

- The Abdullah Quilliam Society. “Who we are: The Abdullah Quilliam Society,” 公開年不明（<http://www.abdullahquilliam.org/>, 2022年6月20日最終確認）。
- Leeds Beckett University. “Ahmad Al Khatib, Bsc (Hons) Biomedical Sciences,” 公開年不明（<https://www.leedsbeckett.ac.uk/alumni/donate/student-stories/ahmad-al-khatib/>, 2022年6月20日最終確認）。
- Liverpool Muslim Outreach Society. “Working to Fight Food Poverty within Merseyside,” 公開年不明（<https://livmuslim.org/>, 2022年6月20日最終確認）。

謝辞

オンライン異文化交流の実施にあたっては、アフマド・アル＝ハティーブ氏に大変お世話になりました。ここに深くお礼申し上げます。

付記

本稿は2020年度松山大学教育研究助成および2020年度JSPS科研費19K00088による成果の一部である。

注

- 1) 2020年度前期は文科省の特例により、1学期15回の授業のうち2回を課題等で代替することが認められたため、実際に実施した授業回数は13回であった。これに関する文科省からの通知は以下のとおりである。「例えば、2コマ分に相当する授業時間を本来予定していた面接授業により行わない場合については、休日や祝日における補講授業の実施や、遠隔授業の実施、又は授業中に課すものに相当する課題研究等に代替すること等により、大学設置基準第21条等で定める必要な学修時間を確保していただく必要があります」（下線部は引用者）（文科省、2020年4月21日）。
- 2) 宗教知識教育とは宗教に関する客観的な事柄に関する教育であり、公立学校で実践が可能である。宗教情操教育はさまざまとらえ方があり、定義も定まっていないことと相まって、公立学校の実践については意見が分かれている。宗派教育とは特定の宗派のための教育であり、私立学校では認められているが、公立学校では禁じられている（井上、2005；平、2006；森本、2014）。宗教学における宗教教育についての議論は井上（2020）を参照のこと。
- 3) アラビア語は大別すると文語（正則アラビア語）と口語（各地域の方言）に分けられ、2つのあいだでは文法や単語等が大きく異なる。このため、筆者が接してきたアラビア語圏から欧米に移民した人々のなかでも、アラビア語で学校教育を受けていない第2世代や第3世代の人々は、会話はできても、読み書きはできない場合が多い。そのなかで読み書きにも堪能なアフマド氏のケースは珍しい。
- 4) アブドゥッラー・クイリアム・モスクはリバブル中心部の北東約2kmに位置する、イギリス初ともいわれるモスクである（イギリス初のモスクがどこかということについては諸説ある）。イギリス人改宗者であるアブドゥッラー・クイリアム（1856-1932）によって1889年に設立された。現在は、南アジア、中東、アフリカ、リヴァブルさまざまな民族的バックグラウンドを持つムスリムが集まるが、なかでもパキスタン、イエメン、ソマリア出身者が目立つ。同モスクのメンバーが中心となり設立された団体も存在する。その1つ The Abdullah Quilliam Society では、アブドゥッラー・クイリアムによって建設された

ヴィクトリア朝の建物の復元プログラムが進められている (The Abdullah Quilliam Society, 公開年不明)。他方で Liverpool Muslim Outreach Society は、ホームレスへの炊き出しをはじめとする貧困者支援活動を行っている (Liverpool Muslim Outreach Society, 公開年不明)。

- 5) 文科省のアウトリーチ活動の定義はつぎのとおり。「国民の研究活動・科学技術への興味や関心を高め、かつ国民との双方向的な対話を通じて国民のニーズを研究者が共有するため、研究者自身が国民一般に対して行う双方向的なコミュニケーション活動」(文科省, 2005年6月7日)。